

## 市史講座第 10 回ミニレポート

1 月 19 日(日)第 10 回の講座が開かれました。

第 1 部 : 「出雲の人制・部民制」(講師: 島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員 平石充 先生)



平石先生は、古墳時代の大王を中心とする王権の支配体制である部民制と人制についてお話しされました。

松江市の岡田山 1 号墳出土鉄刀銘文(考古 p.400~403,698)にみえる額田部臣が部民制を示す最古の史料で、出土遺物から 6 世紀後半には部民制が存在した。この「額田部」はいわゆる推古天皇である額田部皇女の養育を担った集団・組織であると考えられ、「額田部臣」は出雲地域の額田部の人々の首長として必要な物資を貢納するなど、大王(ヤマト王権)を支える中央の「額田部連」に付き従ったのではないかと考えられる。また、「額田部臣」は一方で出雲地域の中では山代二子塚古墳(考古 p.358~361)や山代方墳(考古 p.362~364)の被葬者である最高首長に付き従ったのではないかと考えられる。

されました。

埼玉県の新井古墳出土鉄剣銘文(471 年)には、この鉄剣の持ち主がワカタケル大王の「杖刀人」として奉仕したと記されており、部民制の前段階(5 世紀後半)には人制という大王を支える仕組みがあった。この人制と考えられる某人という名称は『日本書紀』にいくつかみられるが、その記事はワカタケル大王とされる雄略天皇の時期に急増することを指摘されました。また、部民制と異なる人制の特徴として、(1)大王膝下に、(2)人が移住・集住し、(3)奉仕するという点を示されました。

つづいて、『日本書紀』(垂仁三十二年七月己卯条)(古代 p.87~88)にみえる埴輪に関する野見宿祢伝承について、埴輪の創始の部分は評価できないが、松江市の石屋古墳(考古 p.350~353)と大王墓である大阪府の大山古墳(伝仁徳陵)の形象埴輪の関係などから、出雲からの人の上番(人制)の部分は評価してよいのではないかとの見解を示されました。

最後に、この上番が、王権の組織化、社会的分業の一つの契機になったのではないかとまとめられました。

※『松江市史』の史料編に関連記事がある場合、該当巻名とページ数を、「史料編 2 考古資料」は(考古 p.●●)、「史料編 3 古代・中世 I」は(古代 p.●●)と注記した。

## 第 2 部 : 「科学が明かす松江平野の歴史」(講師:文化財調査コンサルタント(株)代表取締役 渡邊正巳 先生)

渡邊先生は「堀尾吉晴、忠氏親子が床几山から眺めた松江平野の風景はどんなものだったのでしょうか。」というテーマで講義を始められました。

今まで松江平野は江戸時代から続く街並みが残り、大規模な開発がなされていませんでした。平成 17 年度の松江歴史館の建設に伴う事前調査までは、大規模な城下町遺跡の発掘調査は行われていませんでした。この松江歴史館建設のための事前調査では、たくさんの遺物や遺構面が確認されています。現在は数年前から進められている、県道城山北公園線(大手前通り)の拡幅工事に先だって、城下町の発掘調査が行われています。この拡幅調査でもたくさんの遺構面などが確認されています。

しかし一連の発掘調査は人間活動の痕跡のあるところだけを調査対象としています。そこで城下町造成の実態などを調査するために、発掘調査の行われている現場で、ハンディジオスライサー(1)、ハンドオーガー(2)などで、より深い地層を採取する調査も行われています。渡邊先生は採取された地層の中に含まれていた花粉の化石などを、科学的に分析して分かってきた城下町の様子を丁寧に説明されました。

花粉の化石の分析から、中世の岸辺の湿地にはガマやヨシが繁茂していたこと、また稲の花粉が見つかったところでは、水田で稲作が行われていたことが分かるそうです。野菜の花粉が見つかったところでは畑があった事が分かるそうです。また屋敷地では稲やキュウリやカボチャ、スイカやフヨウの花粉なども見つかったそうです。このことから屋敷地には田んぼや畑があったことが分かると説明されました。

渡邊先生の説明から堀尾吉晴・忠氏親子が床几山から眺めた松江城下町の景観と、江戸時代の松江城下の生活が少しずつ明らかになりつつあるのがわかります。調査はこれからも続いていきます。新たなデータが加わり松江平野の景観が復元されていくことが期待されています。



※(1)ハンディジオスライサー 重機を必要とせず、ハンディタイプの地層を採取することができる地層抜き取り調査法。

(2)ハンドオーガー 浅い調査を目的とした人力により行える簡易な土質調査道具。